

論文の内容の要旨

論文題目 セルフヘルプ・グループにおける自己物語構成

——「回復の物語」によらない生の創出——

氏 名 伊藤 智樹

本論文の目的は、セルフヘルプ・グループで人々が行なう自己物語構成の社会的意味を理解することにある。こんにちセルフヘルプ・グループは、従来の専門的な治療・援助にはない特性を持つものとして、益々人々の耳目を集めるようになってきている。それに伴って、セルフヘルプ・グループに固有な特性を積極的に認めようとする研究から、支配的な物語の再生産ないし強化というシニカルな見方によってそれをとらえようとする研究に至るまで、さまざまな見方がセルフヘルプ・グループに対して投げかけられるようになってきている。

このような状況をふまえて、本論文は、参加者たちが自己物語構成によってどのような生を創出しようとするのかを分析し明らかにする。従来の研究においては、セルフヘルプ・グループが自己物語構成の場になっていること自体は、既に気づかれていたが、それによって参加者個人がどのような生を切り開くことができるのかは探求されないままになっている。しかし、この点が明らかになって初めて、社会の中でセルフヘルプ・グループが持つ特性を適切に把握することができるのである。

第1章では、上記の問題関心を定めたうえで、導入される基本的な概念と、研究および調査の方法とを示した。具体的な調査の対象となったのは、体験の語りにより目的を特化した集会を持つアルコールリズムと死別体験のセルフヘルプ・グループである。

第2章では、セルフヘルプ・グループに固有な特性を積極的に認めようとする研究をレビューし、その限界を指摘した。それらの研究群は、1970年代後半以降、社会福祉研究の分野で発展したものである。そこでは、セルフヘルプ・グループの特性は、「コミュニティの感覚」を生じさせること、社会的学習のプロセスを作動させること、通常は援助サービスの受け手と思われる人が援助する側にたって心理的な報酬を得ること、そして、体験者だからこそ得られる知識を伝達することに求められている。しかし、これらの説明は、セルフヘルプ・グループにおいて行なわれている言語活動、とりわけその中で大きなウェイ

トを占める体験の語りについて十分な説明を与えていない。

それに対して、人々の語りを「物語」という概念でとらえようとする研究が、主に 1990 年代に生じる。それらによれば、セルフヘルプ・グループは、参加者がどう変わってゆくかを教える物語を共有しており、参加者個人はそのような物語を身につけることによって変化を創造してゆく。さらに、物語の良き語り手となることによって、参加者個人はセルフヘルプ・グループに社会化され、メンバーとしてのアイデンティティを確立してゆく。これらの知見は、人々の語りが意味するものに初めて分析の光をあてた点で評価できるが、しかし、以下のふたつの限界を孕んでいる。第一に、人々の語りを物語として具体的に分析し特徴づける枠組みを発達させていないこと。第二に、参加者がどのような生を創出しようとするのかというよりも、参加者がどのようにしてメンバーとして認められるようになるのかという観点に限定しているために、参加者個人の生活ないし人生の文脈が視野に入らない。

こうした限界を乗り越えるために、第 3 章では「物語」概念の基礎的な検討にまで立ち返ったうえで、ふたつの有効な分析モデルを整備した。ひとつは、W. ラボフと J. ワレツキーによるモデル（ラボフ＝ワレツキー・モデル）であり、もうひとつは C. リースマンによる詩モデルである。前者は、自己物語において、語り手が登場人物（主人公）とは分離した視点から物語内の出来事に対して行なう「評価」に着目することで物語の筋をとらえるものである。それに対して後者は、語り手の「評価」が必ずしも明確でなく、それゆえに混沌とした印象を与えやすい物語を、詩に見立てて全体的に解釈するものである。

また、第 3 章では、人々の自己物語を特徴づけるために A. フランクによる「回復の物語 (restitution narrative)」を参照する意義を論じた。ここでいう「回復の物語」とは、「昨日私は健康であった。今日私は病気である。しかし明日には再び健康になるであろう」という基本的な筋を持つ物語を指す。つまり、個人の内にある欠損ないし欠落を中間とし、物語の始点と終点とを取り戻されるべき同一の健全な状態とする、というところにこの物語の特徴がある。「回復の物語」に着目する意義は、この物語に自らを適合させにくい人々がいるかもしれない点にある。

第 4 章では、セルフヘルプ・グループのテーマについて治療の専門家たちが「病気」として語る言説を扱う。ここでの観点は、それらの中にどのような物語が埋め込まれているかということである。さまざまな説明図式を俯瞰すると、人々の経験を包摂するような大きな物語が医学ないし心理学によって提供されているとはいえ、むしろ物語の不在ないし散在として事態をとらえることができる。ただし、そうした中であって、アルコールリズムの精神病理学的説明と、死別による悲嘆の段階論とは、「回復の物語」としてとらえることができる。

第 5 章では、アルコールリズムのセルフヘルプ・グループにおける人々の自己物語構成を分析した。まず、ラボフ＝ワレツキー・モデルによって集会での自己物語を分析した結果、いくつかの形態が見出されたが、その中には「転落と再生の物語」が最も主要な物語の形態だと考えられる。また、セルフヘルプ・グループの参加者の中から、継続的な参加に積極的な人と、ある程度の参加を経てグループを離れようとする人との複数回のインタビュー

一を、比較対照しながら分析した。前者は後者に比べて、物語の筋を転落から再生へと転じさせる契機となる出来事、すなわち「エピファニー」(N. デンジン) に繰り返し言及し、細部までありありと描くように語りなおそうとするところに特徴があった。

第 6 章では、死別体験のセルフヘルプ・グループにおける人々の自己物語構成を分析した。ラボフ＝ワレツキー・モデル、および、リースマンの詩モデルによって集会での自己物語を分析した結果、いくつかの形態が見出された。その中で特徴的な部分は、第一に、主人公の状態が良くなってゆく「前進的な物語」がある一方で、主人公の状態が良くならない「ネガティブな感情の物語」も見出せること、第二に、語り手が故人の存在をありありと感じ取ることができるような「記憶の物語」が語られることである。また、第 5 章と同じように、セルフヘルプ・グループへの継続的な参加者を好む人と、そうでない人との比較分析も行なった。その結果、前者の自己物語の方に、セルフヘルプ・グループの物語形態がよく反映していることが分かる。他方、そこでは、長期的に見れば悲嘆を癒してゆく変化のように見えても、その過程に注目すれば、他者の物語に「回復者」のイメージを読み込んで、そこから距離をとって「私」を描こうとしているのが特徴的であり、このようにして、いかに自分が容易にはポジティブに変わっていけないかを示すことに、死別体験者の自己物語構成の特徴があると考えられる。

第 7 章では、これまでの分析をふまえて、本論文の問いである、参加者たちはセルフヘルプ・グループにおける自己物語構成によってどのような生を創出しようとするのかを考察した。

第一に、参加者がセルフヘルプ・グループの良き語り手になることで可能になることは、グループのテーマによって異なる。アルコールリズムの場合には、エピファニーを細部までありありと描くように語りなおすことで、転落と再生の筋を際立たせ、それに合うように酒を断つ人生を組み立てようとする。一方、死別体験の場合には、近代社会における良き死の基準である個別性を、いかに自分が容易にはポジティブに変わっていけないかを語る身振りの個性と、固有な死者とのつながりを再確認させる記憶の物語とによって、満足させようとする。

第二に、こうした人々の語る物語はA. フランクのいう「回復の物語」とは異なるものとしてとらえられるべきである。「転落と再生の物語」や「前進的な物語」は、直感的に「回復」をイメージさせやすい。しかし、参加者たちの自己物語と、アルコールリズムの精神病理学的説明、および、死別による悲嘆の段階論にみられる「回復の物語」との間には乖離がある。このような乖離の背景には、セルフヘルプ・グループの語り手たちが「回復の物語」を見事に語ることでできない理由があり、本論文では、アルコールリズムと死別体験それぞれの場合について、その理由を考察した。

第三に、セルフヘルプ・グループは、「回復の物語」を見事に語るができない人々、言い換えれば物語論的な生き難さを抱える人々にとって、自分に合った物語を模索してゆく過程に連れ添って耳を傾ける聞き手としてとらえられる。この聞き手は、語り手を刺激したり退屈したりすることによって、さらなる自己物語構成を促す一面も持っている。

第 8 章では、本論文の問いをふりかえって結論をまとめ、今後の展開について述べた。

セルフヘルプ・グループにおける自己物語構成によって、参加者たちは「回復の物語」によらない生を創出しようとする。このような生の創出を支える機能を果たしうる点にこそ、われわれの社会におけるセルフヘルプ・グループの固有な特性を認めるべきである。社会学は、こうした特性をふまえながら、さまざまなテーマを持つセルフヘルプ・グループにおける物語の布置を分析的に理解し、必要に応じて独自の見方と助言を与えることができるだろう。